

---

# 私立武争学園 Dクラス戦闘報告書

蒼輔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私立武争学園 Dクラス戦闘報告書

### 【Nコード】

N7417K

### 【作者名】

蒼輔

### 【あらすじ】

学校内でクラス間の戦争勃発！？周りの人間は奇人変人がたー！  
ー！ー！ー！ー！くさん！！俺の人生、立った一度の学生生活が崩壊していくー！  
ー！  
一人の少年を中心に展開していく、何でもありのドタバタ系ラブコメディー！！

## 始まってしまった俺の不幸

春：新たな出会いの季節だと世間は言う：最初の内は俺、『神沢<sup>かみざわ</sup>歩<sup>あゆむ</sup>』も新たな出会いに期待してたさ、長身だけが取り柄で面倒くさがりな俺でもな。ああ、してたとも。

…あいつ等と知り合うまではな。

私立武争学園：七年前に親父とお袋が創った大学と高校が一緒のエスケーター式の学園で、ある画期的な最新のシステムと技術を取り入れたことで話題になっている。その画期的なシステムとは…クラス間の戦争。正直、そんなことをやれる訳がないと思うだろう？ところが、それが可能になっちまったのさ…擬似戦闘システム、『バトルライザー』ってのが作られたせいだな。これは世界のお偉いさん方のいざこざを犠牲無く平和的に終わらせようと某大学の研究チームが国に以来されて開発を開始して、それから…まあ、簡単に言えば戦争を血を流さずに終わらせる為に作られた訳さ。それに目をつけたのが理事長と学園長、俺の両親ってわけさ。わざわざ勉強にリンクする様にしたバトルライザーを作り出しゃがった。才能の究極の無駄使いだ。…ちなみに、その学校用のバトルライザーの実験台は俺だったりする。中三になって、進路は問答無用で決定。そして…俺の一生忘れられない学園生活が幕を開けたのさ。

入学式：体育館でのくっだらな理事長と学園長（親）の話と生徒会長らしき生徒の挨拶が終わって、クラス分けがあるからということとで土間の前に新入生は集められた。ちなみに、この学校に学年はあるが、クラスは学年別ではなく同じクラスの学年で一つのクラスとなっている。流石に大学と高校は別になっているがな。しかも最初に分けられたクラスは大学卒業まで変えられる事は無い。…改めて思うが無茶苦茶だ。クラスはA〜Hまである。親父曰く、Aが最

も良いクラスらしい。最悪はDらしい。しかもクラスは受験の時にやった心理テスト的なもので決められているらしい。つまり、クラス分けに学力は関係ないらしい。なのに最高と最悪が決まるらしい。これまた無茶苦茶だ。全く…この学園では常識は通用するんだろうか？まあいいや、いずれ慣れるよな。

「次、193番、神沢 歩！！」

おっと、俺のクラスが言い渡される様だ。当然Aだろ。だって、親が理事長と学園長なんだぜ？Aに決まってるさ。大切な大切な長男なんだぜ？

「Dクラス！！」

俺はいらない息子の様だ。

クラス発表が終わった。結局、Dクラスを言い渡されたのは新入生160人中…俺を含めて4人だ。俺と、黒の強い蒼の髪で不敵な笑みを浮かべている男子と、金髪のロングヘアーで明らかに気の強そうな長髪の女子と、銀髪ショートヘアーの見るからに無愛想な女子だ。新入生はとりあえず各クラスの校舎に行く事になったので、当然、俺たち四人もDクラスの校舎に向かうわけだが…俺の気分はかなりブルーだった。だって四人だぜ？これからやっていけるのかな俺？これからの不安にかられつつ、俺（正式には俺達）はDクラスの校舎に向かうのだった…

「おい、その青年よ…」

黒の強い蒼の髪の男子が話しかけてきた。…終わらせようとしたのに何しやがる。

「…何？」

仕方が無いから会話をする。初対面から無視はできないしな。

「名は何と言う？」

怪しいわりには普通な質問だな、おい。

「神沢 歩だ。お前は？」

「俺は『伊集院』だ」

「下は？」

「マイケルとでも言っておこう」

前言撤回。まともな奴じゃないな、うん。

「して、その女子<sup>おなこ</sup>二人よ、名はなんという？」

名前を聞いたらそこまでののか！？

「『ルミナ・綾瀬<sup>あやせ</sup>・アークスレイ』よ」

「『岩瀬<sup>いわせ</sup> 詩織<sup>しおり</sup>』」

お、彼女達は普通っぽいな。

「あんたらの名前は？」

ルミナが聞き返してくる。まあ、相手が名乗ったんだからこつちも名乗るのが普通だな。

「俺は神沢 歩」

「俺は伊集院だ」

「…伊集院…下の名前は？」

名乗ると同時に岩瀬が伊集院に質問した。

「ジョニーとでも呼ぶがいい」

さっきと違うじゃねえか！！

「…そう…」

そう言つと岩瀬は何事も無かったかの様に黙つた。…本当に無愛想な様だ。

「む…着いた様…だ…ぞ？」

いつの間にか先頭を歩いていた伊集院が足を止めた。本人の言つたとおり、校舎に着いたよう…だ？

「何じゃこりゃ！？」

俺は驚きのあまり驚愕の声を出してしまった。…なんせ俺の目の前にはどっかの童話のシ〇デ〇ラに出てくるかのようなお城が建っていたんだからな。

## VS 城の魔物

俺の目の前にはありえない光景が広がっている。お城だぜ、お城。日本のあのお城じゃなくてシ〇デ〇ラに出てくるようなお城さ。いきなりのお城に俺以外のメンバーも驚いたようだ。良かった、伊集院も岩瀬もちゃんとした人としての感性を持つてい…

「ハッーハッハッハッハ…！！俺の野望に、正にピッタリではないか…！！」

「…面白そう…」

…ないようだ。

「ここつて、学園？…よね？」

良かった、ルミナは普通だ。

「私の家にも無いのに…」

前言撤回。言動がおかしいね、うん。

「さて… My new friends 諸君、我らが新たな学び舎に行こうではないか」

伊集院の言つとおりだろう。もうこのお城のネタで突っ込むのも疲れたしな。

「そうね、行きましょうか」

ルミナも俺達を促す。見れば岩瀬も小さくうなずいていた。無表情だが顔立ちがいいのでかなり可愛い。が、そう思ったのもつかの間、…どんなボスがいるんだろう…」

彼女の口からとんでもない言葉が飛び出した。ボスってなんだ！？ド〇ク〇か！？それともF〇か！？

「とにかく、入ろうぜ」

正直、突っ込みつかれた俺は早々に校舎という名のお城に逃げ込むことにした。これ以上は流石に付き合いきれんさ。

土間でスリッパに履き替え、何故か土間にあった地図をとって描い

である通り教室に向かったまでは良かった。だが、俺の受難はまだ続いていた。

「ギャオオオオオン！！」

何でドラゴンがいるの！？つか、本当にボスがいたあ！！

「ほおう…面白いではないか…」

伊集院は不敵な笑みを浮かべてるしい！！

「…大きい…」

岩瀬、ここは冷静になつてる場合じゃにだろ…

「これ…どうするの！？」

良かった、ルミナは普通らしい。

「つか、本当にどうするんだよ！？」

試しにみんなに聞いてみる。すると、

「我が親友、神沢よ…あれを見る」

いつからお前と親友になつた！？とりあえず伊集院が指を指した場所に目をやってみる。そこにあつたのは…ご丁寧に人数分置かれたバトルライザー。

「これでドラゴンと戦えつてかあ！？」

驚愕の声を俺が上げる。実験台になつていた俺なら慣れているので、面倒だが大丈夫だ。だが、初心者にそう簡単に使いこなせるわけがない。しかし、困って驚いてたのは俺だけの様だ。

「フム、これは肩に着けるのだな」

「…初陣…」

「やるっきゃないわけね！！」

みんなやる気満々だ。…もうどうにでもなれ！！俺はバトルライザ

ーを肩に着ける。そして…

「ライザーシステム、起動！！」  
アウェイクン

バトルライザーを起動させた。

「…起動！！」  
アウェイクン

三人も続けて起動させる。そして魔法陣が自分の足元に浮かび上がる。

ここでバトルライザーについて説明しておこう。最初に説明した通り、バトルライザーは血を流さない国家間の争いの解決のために開発された機械だ。その最大の利点とは、最新技術をつぎ込まれて造られた擬似戦闘システムにある。一定範囲で感覚まで現実と一緒の空想空間を作り出し、その中で自分の武器えものを持ち込んで兵隊さんが戦闘を行う。その空想空間内での戦闘では、痛みも感じるし服とかも破れたりと本当に現実と大差が無い。しかし、一度空想空間を出るまたはバトルライザーを停止させると、なんと体力を消費しているだけ、つまり血が流れないという訳さ。勝ち負けはその時によってルールが違うらしいが、戦争の事なんて俺は詳しく知らんさ。それを学校用に改良したのが俺の両親、理事長と学園長だ。色々な商品や特例を勝ちとらせるために生徒同士にクラス間で戦争させ、それによって学力の向上を狙ったのさ。だが、戦争させるだけじゃあ学力向上にはつながらねえ。だが、システムにテストで採った点数を力としてリンクさせる、つまり、勉強しなきゃあ強くなれないようにしたのさ。しかも点数が高いと、超能力的な新しい能力に目覚めるのさ。…まあ、とりあえずはどんなバカでも戦えるように工夫はしてあるんだがな。その工夫つてのは初期装備システム（俺命名）といって、最初にやった心理テストのデータをバトルライザーに読み込み、それによって自分にあつた武器とちよつとした特殊能力を得られるってシステムだ。…何？ネーミングセンスが皆無だと！？…気にするな！！まあ、こんだけ知ってるのは俺が実験台だったからなんだけどな。ちなみに、この学園では敵のバトルライザーを破壊した方が勝ちだ。

さて、ここからストーリーに戻るとしよう。魔法陣から球体が浮かび上がり、それが各々に応じた武器になった。それぞれがその武器を手に取る。俺はシンプルな日本刀だ。伊集院は…手裏剣に忍刀にクナイ…忍者セットみたいだな。岩瀬は槍に片方に斧、片方に鎌が



ついている武器、ハルバードだ。ルミナは黒に金色の模様が描かれた装飾銃だ。…みんな見事に統一性が無<sup>ね</sup>えなあ、おい。まあ、いいや。とにかく、あの非現実的なドラゴンを倒すでしょう。三人とも初心者だ、俺がなんとかしよう、そう思った時だった。岩瀬が無言でドラゴンに突撃した。しかも信じられない事にドラゴンの攻撃を全て回避してやがる。そしてそのまま…無言でハルバードの斧の部分を容赦無くドラゴンの尻尾に振り下ろした。

「ギヤオオオオアアア…」

一刀両断、ドラゴンの尻尾は付け根の部分からバツサリと斬り落とされた。ドラゴンは苦痛の声を漏らしている。そこに間髪入れずにルミナが動いた。装飾銃を撃ちまくる。鈍い音をたてて弾丸は全て鱗に弾かれている。どうやら岩瀬は銃弾を通さないような強度を苦もなく叩き斬ったわけだ…化け物かよ。その岩瀬がまた動いた。今度は一気にドラゴンの背中まで駆け上がり、肩翼を付け根から斬り落とす。…痛そうだな…あまりの一方的な展開に、俺はドラゴンに同情してしまった。

「ハッハッハッハッ…寝るにはまだ早いぞ、爬虫類よ!!」

いつの間にやら行動していたのか、伊集院が忍刀を両手に持ってドラゴンに一気に肉迫し、ルミナが銃弾を当てた場所を恐ろしい速さで正確に攻撃していく。銃弾によってダメージを受けていた鱗は簡単に砕け、ドラゴンの皮膚に忍刀が深々と傷をつける。そして…あつけなくドラゴンが倒れた。俺の出番はゼロだ。

「やった、勝った!!」

「フツ…当然だな」

「…クリア…」

三人が口々に喜びの声を上げる。俺の肩身がやけに狭い。まあいいか、俺も混ざろう、そう思った時だった。不幸って連鎖するもんだな。あんの爬虫類、まだ息がありやがった。ドラゴンが立ち上がったのに気づいたのは…俺一人。

「危ねえ!!!三人とも、伏せろお!!!」



## 憂鬱

朝<sup>けまなこ</sup>：学生、社会人、どんな人にしたって憂鬱な時間帯であろう。眠<sup>ねむ</sup>気眼を擦り、何とか布団という名の人間ホイホイから抜け出し、顔を洗い、着替えて朝食をのんびりと食べながら、さて、今日はどうしようか？、なんて事を考える。俺だってそうだったさ。だが…現実には許してくれなかったんだ…俺が平和に生きる事をな。何故かって？『対Bクラス作戦会議』…登校し、教室に着いたらいきなりこれだよ！！我らがDクラスの教室にはでかかとその文字が書き込まれていたのさ。…どうしてこうなったのか、おつて説明していい。

非現実の爬虫類、ドラゴンを倒した後、俺は気を失った三人が起きるまでその場で待っていた。数分したら全員無事に起きた。…バトルライザーは現実には影響しないんじゃないのかって？確かに怪我はしないが、あくまでも感覚はそのまんまなんだ。殴られりやあ痛いし、その空間の中では怪我をしてるんだ、動けなくもなるし気絶もする。まあ、簡単に言えば外傷は無いだけってわけだよ。そんな訳で、三人が目覚めましたからそのまんま一緒に教室に向かったんだ。その後だった…ある出来事が起こったのは…

十分後、俺達は地図を見ながらなんとか教室の前まで到着した。…何で土間から教室がこんなに離れてるんだよ！？外見は外国風のお城であるこの校舎も、教室は至って普通だった。俺は内心ホツとしながらドアを開けたその時だ、クラッカーの快音が鳴り響いた。そして…

「…」新生のみなさん、ようこそ、Dクラスへ！「…」  
三人の女先輩が俺達を迎えてくれた。どうやらクラッカーはこの為だけにわざわざ用意してくれたようだ。…そんな事よりも、三人

とも美少女としか言いようが無いほどレベルが高かった。一人は綺麗な黒髪のロングヘアーで、それをポニーテールに纏めている、活発的な印象を受ける。一人は茶色のロングともしョートともいえない長さの髪だ。しかし、両眼の色が右が赤で左が青という、オツドアイが特徴的だ。一人はライトグリーンの様な鮮やかな黄緑色のショートヘアーの髪に、フレームが丸い眼鏡をかけ、知的な印象を受ける美少女だ。…レベル高いな、Dクラスつて。

「みんなー、新入生がとうちやくしたよー」

オツドアイの先輩が教室の中に向かって知らせた。

「ささつ、入って入って」

そのまま流れるように俺達四人を教室に招き入れる。どうやらオツドアイの先輩は仕切るのが上手いようだ。何せ教室に入って、気づいたら席まで勧められてるんだからな。…いや、俺がボツーとしていただけだな。俺は何気なく教室内を見渡してみたが、さっきの女子の先輩と俺達新入生を除くと…男子の先輩が四人…少なさっ！！後は教壇の近くに居る教師らしき男の一人だけ。…本当に学校かよ、ここは。

「よし、新入生も来たし、まずは自己紹介から始めようか」

教師らしき人がそう告げつつ教壇の前から退いた。それに続く様に、高校生としては高めの身長で、黒い肩までとどく長さの髪の先端の一部に真紅のメッシュが入った男の先輩が、面倒くさそうに立ち上がり、教壇の前に立った。どうやら先陣を切るつもりようだ。…

まともな人であってくれ。

「三年、Dクラス生徒総司令長の『せいとそうしれいしやう暁香 昂輝』だ。ま、気楽にやつていこうや」

簡単に自己紹介を終え、暁香先輩は教壇の前から退いた。…俺と同じ面倒くさがりの匂いがするな、あの指令長。だけど、動きに無駄を感じられなかった。実はすごい人なのかもしれない、そう思えた。この際、学園なのに総司令長つてそこには突っ込まないでおこう。次に教壇の前に立ったのは、黒髪ロングのポニーテールの女子の先

輩だ。改めて先輩を見てみると、スラッとしたしなやかな肢体で、見るからに爽やかであった。

「同じく、三年のDクラス生徒副総司令長の『久城 優姫』です。昂ちゃんと同じく、私はみんなの指揮を執る立場ではありますが、氣を使わずに仲良く行きましょう」

…昂『ちゃん』、だと…？おのれえ、久城先輩はもう既に予約済みのか…。とか何とか考えてる内に、次の先輩が教壇に立った。男の先輩で、緑色のターバンを頭に巻き、弦がギザギザになっているサングラスをかけていた。…どこぞかのロッカーかよ。

「同じく、三年の『澤木 潤』だ。よろしくな」

…自己紹介は意外に普通だった。次も男の先輩で、少し小柄で、黒いショートヘアー…残念がらこれと言った特徴が見当たらない…。

「同じく、三年の『獅子堂 僚矢』といいます。先輩、後輩関係無く、フレンドリーにやっていきましょう」

…獅子堂先輩、本場で特徴が無えな、おい。次は…四角いフレームの眼鏡をかけたグレーのショートヘアーで、異様に長身な男の先輩が立ち上がった。…2mくらいはあるんじゃないのかね、あの先輩。「同じく、三年の『御久間 聖子』です。とりあえず、よろしく」眠たそうにしながらの御久間先輩の自己紹介…あの人も俺と同じ匂いがするなあ…。次はいよいよ女子の先輩方の番の様だ。久城先輩は生徒副司令長だったので先にしたのである。まずはオッドアイの先輩が教壇の前に立った。

「同じく、三年の『榊宮 朱里』です。明るく、元気よくやっていきましょう！！」

…テンション高めな…俺はついていけないかもしれないと思った。次は、ライトグリーンショートヘアーの眼鏡をかけた先輩だ。

「二年の『椎堂 美夜子』です。本当なら僕以外にも後二人二年生がいるんですが、都合で席を外しています。だから二年生は一人だけじゃないんで、安心してね」

…うん、この説明が無かったら俺も一人だけかと思っただよ。次はど

うやら俺達の番みたいだな。もうすでにルミナと岩瀬は自己紹介を終えた様だ。次は伊集院の番みたいだ。

「伊集院という。先輩方これからよろしく頼むぞ」

何様だあ！？

「下の名前は何て言うの？」

榊宮先輩がそう尋ねる。…俺達もした質問だ。流石にここなら真面目に答え…

「ワトソンとでも呼ぶがいい」

…無い様だ。新人生以外は大笑だ。次は俺だ。無難にすますとしよう。

「えーっと、俺は神沢 歩です。みなさん、よろしくお願いします」OK、我ながら上出来だ。やっぱり普通こそがベストだよな、そう思いながら教壇の前から退き、席に着いた。最後は先生の番の様だ。

長身でがっしりとしっかりとした体に、さっぱりとまとめた刈上げの髪、正に体育会系といった感じだ。

「俺がDクラス担任の『卯佐美 猛士<sup>うさみ たけし</sup>』だ。いいか、俺は個人の意思を第一に優先する。俺はその意思には反対もしないし賛成もしない。去年同様、今年もお前達のやりたいようにやれ、以上だ」

やりたいようにられて…Dクラスが最低と言われる原因が多少分かった気がした。卯佐美先生は教壇から退き、教壇の前に暁香先輩が立った。どうやら後は暁香先輩が仕切るようだ。

「さて、ここからの予定を…」

そう言った瞬間だった。爆音と共に教室のドアが…吹き飛んだあ！？立ち上がる煙の中から、バトルライザーで武装した集団が教室に入ってきた。左肩に着いているバトルライザーの真ん中の水晶にはBの字が刻まれている。…つーことは来たのはBクラスか。聞いた事がある。BクラスとDクラスは犬猿の仲だと。

「何の用だ…Bクラス生徒総司令長、『倉野 興二<sup>くらの きょうじ</sup>』！！」

暁香先輩がBクラスの一人を思いつき睨んだ。他の先輩は既に身構えており、戦闘態勢だ。すると、Bクラスの一人が進み出てきた。

そして…

「よう、暁香… Dクラスの分際で新入生なんか手に入れてんじゃねえよ…」

どうやら無茶苦茶な理由で攻めてきた様だ。倉野は手に持っていた両手剣を暁香先輩に突き付ける。そして…

「気にいらねえなあ… BクラスはDクラスに戦争を申し込む」

いきなり無茶苦茶な理由で宣戦布告してきた。

「そんな無茶苦茶な宣戦布告、受けられるわけが…」

俺がそう言おうとした時だった。

「…良いだろう… 受けてやる、その宣戦布告…。」

暁香先輩がとんでもないことを言ってしまった。

「ただし… 勝った方が何でも一つ相手の言う事を聞く、… それでどうだ？」

言う事を聞く！？ 何て事を！！ 俺達も被害を受けるってことかよ。

「いいぜえ… それでよお。ギッタギタにしてやらあ！！」

そう言うのと、Bクラスは撤退して言った。… マジかよ！？ 入学からいきなり戦争すんのか！？

「みんな… 歓迎会は延期だ… Bクラスとの戦争会議をするぞ！！」

待てよ、いくら総司令長である暁香先輩がの決定とはいえ、俺は反対だ。面倒くさいからな。みんなは…

「フツ… 面白いではないか」

「… 勝つ…」

「いきなりの戦争って、おもしろそうね」

「昂ちゃんの決めた事ならどこまでも…」

「返り討ちにしちゃあー！！」

「僕は一向に構わないよ」

「しゃーない、やってやろう」

「やるのはいいけど、やりすぎんなよ」

「了解だ」

… やる気満々なんだな…。

こうして、俺の朝は憂鬱から始まるのだった…



## 模擬戦 1（前書き）

遅くなつてすいません。まだちょっとバタバタしてますが、ちょっとずつでも書いていくつもりです。

## 模擬戦 1

Bクラスとの戦争が決まった次の日、俺達Dクラスは曉香先輩を中心としてBクラスとの戦争の作戦会議をしていた。そして、曉香先輩の結論は…

「まず、一年がどんな力を持っているか、模擬戦闘して調べるぞ。そうしないと作戦が決まらない」

…とのことだった。面倒だがもつともだろうな。俺を除いて、一年はまだバトルライザーの機能を完璧に把握できていない。更に、当然ながら一年は先輩の能力も知らない。ただでさえ人数の少ないDクラスだ、一年生が即戦力にならなければ戦争など出来ないだろう。今日一日、全ての授業を免除してもらおう。俺は今からその旨を学園長と他の先生達に伝えてくるから、俺が戻り次第模擬戦闘を始めるぞ」

そう言って曉香先輩は教室から出て行った。入れ替わる様に久城先輩が教壇の前に立った。

「さて、昂ちゃんが居ない間に一年生のクラス登録を済ませます。登録しておかないと、戦闘等のバトルライザーを使った行動が一切できません」

また面倒な事を…って、登録しないとバトルライザーが使えない？じゃあ何で昨日のドラゴンを倒す時は使えたんだ？

「ああ、ちなみに、昨日四人が一年生の腕試し用のドラゴンと戦った時に使ったバトルライザーは、御久間くんがリミッターを一部外した特別製のやつなの。だから使えたってわけ」

俺達の疑問に気づいたかのように、優しく微笑みながら久城先輩が補足してくれた。成程な…ってえ、あんたらがあのだらごんを差し向けた張本人かよ！！現実には害は無いけど、痛みだけは本物なんだぞ！！

「それじゃあ今から一年生にバトルライザーを配ります。朱里ちゃ

ん、お願いね」

「ハイハイ！」

声をかけられた榊宮先輩は、席から立ち上がると、ロッカーの上に置いてあった段ボール箱を持ってきた。その中から更に一回り小さい、煉瓦くらいの大きさの箱を取り出した。…あれ？バトルライザーってあんなに小さかったっけか？たしかコンピューターのキーボードくらいの大きさはあったはずだ。あんな小さな箱に納まるような大きさじゃない。本当にバトルライザーなのか？そう思いながら配られた箱を受け取る。

「それじゃあ、箱から出して装着してみて」

全員が受け取ったのを確認すると、久城先輩は一年生にそうすすめた。俺は箱を開けてみた。そこに入っていた物は…甲の部分に透明な水晶が付いた機械が付いている指先の部分が無い手袋。しかも片手の分だけ。俺もこんな形は見た事が無いが、手袋なんだから手に装着するんだろう。機会が手の甲の部分にくる様に装着した。伊集院達も不思議そうな顔をしながら同じようにしている。

「君達がドラゴンと戦う時に使ったバトルライザーは試作品だから、無駄に大きいし、肩の様な戦う時に<sup>ま</sup>的になりやすい部分にしか装着出来なかったの。これはDクラスが独自に開発し、小型化したものよ。ちなみに、クラスによってバトルライザーは違うから、他のクラスと戦う際は注意してね。装着しだい、各自バトルライザーを起動してね」

クラスで独自に開発したなら俺も知らないわけだ。なら、心配いらないな…

「ライザーシステム、<sup>アウェイクン</sup>起動！！」

俺はバトルライザーを起動させる。伊集院、岩瀬、ルミナも同じ様に起動させている。四人の足下に魔方阵が浮かび上がる。そこから光の球が現れて…こない。あれ、いつも武器に変化する光の球が現れるのに…何で現れないんだ？そう思っていると…

「神沢 渉ヲDクラスニ登録、システム起動ヲ承認シマス」

バトルライザーの水晶が発光し、機械の声が聞こえてきた。すると、透明だった水晶が金色に染まり、眩いばかりの金色の閃光が放たれた。そして…

「何じゃこりゃあ!？」

俺の姿はどこぞかのゲームの勇者の様な服装になっていた。…俺の学ランは何処にいったんだっ！？両肩が丸出しの蒼を基調とした英国風の貴族服。肘から先は文字の刻まれた銀色のガントレットで覆われ、白を基調としたズボンには何かマントの様な布が着いている。刀は普通…じゃなかった。刀身には何か分からない文字が刻まれ、柄が少し豪華になっている。バトルライザーの水晶には…Dの文字が刻まれている。一年生はみんなセーラー服や学ランではなくなっている。伊集院はまるつきり忍者の姿だ。岩瀬はへそまで無い黒のタンクトップにボロボロなジーパン、いわゆるダメーシジーンズだ。…露出多いな、おい。ルミナは緑を基調としたワンピースだが、ドレスっぽい要素も混ざった様な感じた。ハンドガンは金で装飾を施された装飾銃になっている。みんなドラゴンと戦った時とは全く違う。俺も実験の時にこんな姿になった事は無い。…どうなっただんだ？

「はい、これでみんな正式にDクラスに登録されました。ちなみに、この変身機能はこっちの方が面白そうだったことで、学園長と理事長が去年から取り付けた新しい機能です」

久城先輩はエスパーか！俺の疑問を聞く前にことごとく答えている。…おそろしや、久城 優姫…とかなんとかくだらない事を考えていると…

「サンキュー、優姫。ほう…中々に様になってんじゃねえか、一年生。とりあえず一回システムを解いとけ。初めの内は長い時間使うと体力がもたないからな」

暁香先輩が帰って来た。手には許可書と書かれている紙を持っている。…本当に授業無くしてきたんだ…。とりあえず言われた様にシステムを止めた。久城先輩が席に着き、暁香先輩が教壇の前に立つ。

「おつし、これから模擬戦闘を始める。まずは…岩瀬、お前からだ」  
「…了解…」

岩瀬がトップバッターの様だ。ドラゴンを倒した時、多分彼女が一番ドラゴンにダメージを与えていただろう。…何が言いたいかって？決まってる、岩瀬は…多分無茶苦茶強い。

「相手は…そうだな、朱里、やってくれるか？」

「ラジャー！！」

指名を受けた榊宮先輩は元気よく立ち上がると、教室の後ろ、丁度大きく空いているスペースに向かった。岩瀬も無言でそれに続く。そして、二人とも構えた。

アウェイクン  
「いづくよー！！起動！！」

榊宮先輩のバトルライザーが起動した。藍色の光が先輩を包んだ。その光が解けると…凛々しい英国の女騎士の姿となった先輩の姿があった。手には…身の丈ほどもある両手剣。…かなり強そうだ。

アウェイクン  
「…起動…」

岩瀬のバトルライザーも起動した。白い光に包まれ、岩瀬愛用のハルバードが出現し、服装も変わった。

「準備はいいな、二人とも？」

暁香先輩が二人に尋ねた。

「オッケーだよ」

「…問題無い…」

準備万端の様だ。

「それじゃあ…バトル、スタートだ！！」

暁香先輩の合図と同時に、二人同時に突撃し、模擬戦が始まった。

## 模擬戦 2

岩瀬のハルバードと榊宮先輩の両手剣がぶつかりあった。単純な力は…互角。そのまま二回、三回と刃を交える。四回目を交えたところで鏢迫り合いの様な状態になった。先に動いたのは…先輩だった。左手を剣から離し、そのままストレート。岩瀬は後ろに跳び、紙一重で先輩の拳を回避した。

「やるねえ、しーちゃん。一年生でここまでやれるなんてびっくりだよ」

「おいおい、いきなり三年生から絶賛されてるよ。しかも『しーちゃん』なんて呼ばれてら。」

「けどね…」

いきなり先輩の雰囲気が変わった。…まさか…

「力押しだけじゃあこの学園じゃあ生き残れないよ…!!」

先輩の剣の刃が光った。そのまま容赦なく剣を振り下ろした。光の刃が岩瀬に襲いかかる。入学したての一年生相手に能力を使いやがった!? ヤバい、岩瀬に防ぐ術は無い!! つか、防げねえ!! 他の先輩も止めようとする気配はない。

「くそつたれがあ!!」

俺は叫びながら駆けだした。

「ライザーシステム起動!!」  
アウェイクン

自分のバトルライザーを起動させた。金色の光に包まれ、その光から飛び出す感じで二人の間に割って入る。目の前には光の刃。その刃に対して左手を銃の形をとってかざす。

「能力解放、いっけえ!!」

その瞬間、俺の指先から稲妻が迸った。はし稲妻は真っ直ぐに光の刃にぶつかり、光の刃と共に四散した。

「いきなり能力ぶっ放すなんて酷いんじゃないんすか、榊宮先輩!!」

いきなり割って入って猛抗議だ。

「だって。どうする、昂輝？」

榊宮先輩は何事も無かったかのように暁香先輩に判断をあおいだ。クラスの責任者である暁香先輩は必ず正しい判断を下して…

「構わん、二対一で続ける」

…あんたら鬼か！？こうなりやあ…

「岩瀬、下がってろ」

全力で戦<sup>や</sup>るしかない。俺は岩瀬を下がらせる。岩瀬は静かに頷くと、数歩後ろに下がった。

「りよゝかい。そんじゃ、手加減抜きでいつくよゝ！！」

榊宮先輩も剣を構えた。

「本気でいくよ…どうなっても知らないからね？」

につこりと悪魔の笑みを浮かべながら恐ろしい事を言う。

「闘<sup>オラフレイド</sup>気剣、解放！！」

さっきの一発とは違う、凄まじい光を放つ先輩の剣。本気の様だ。

「上等…リミット解除…先輩こそ、どうなっても知りませんよ？」

俺は刀に手をかけた。いわゆる居合い斬りの構えだ。

「リミット解除！！」

俺の周りに凄まじい量の蒼い雷が渦を巻く。…俺と先輩の目があった。そのまま両者とも突撃した。雷を纏った刀と、光を纏った剣がぶつかり合った。その瞬間、凄まじい閃光と爆発が巻き起こった。外からは煙で中の様子が全く分からないだろう。…煙が晴れた時、その場に立っていたのは…榊宮先輩ではない、そう、俺だ。

「成程な…」

倒れている榊宮先輩を見ながら暁香先輩が呟いた。

「神沢 歩…」

暁香先輩は立ち上がりながら俺の名前を呼ぶ。

「お前の次の相手は…俺だ」

そのまま地獄の二連戦が宣告された。しかも…相手は暁香先輩…いきなりバ〇バ〇ス並の人が出てきた。

## 模擬戦 2（後書き）

短くてすいません。次は少し長めにする予定です。



## 雷VS炎

俺は刀を構えて無言で暁香先輩を睨み付ける。

「バトルスタンバイ、起動！<sup>アウェイクン</sup>！」

暁香先輩がバトルライザーを起動させた。先輩を紅い閃光が包み、弾けた。その場に、紅い改造された燕尾服に身を包んだ先輩が立っていた。…見るからに強そうだ。そんな風に思っていると、いきなり先輩が…消えた。気付いたら目の前にいる。…ヤバイ、避けられない！咄嗟に左の掌を前に突きだし、稲妻を放つ。瞬間、また先輩の姿が消えた。一瞬、俺の耳に風を切る音が聞こえた。…後ろか！？  
「ほう…このスピードによく反応したな」

…後ろを向いた瞬間、俺の顔面が先輩の左手に鷲掴みにされた。それを認識した瞬間…凄まじい熱さと激痛と共に浮遊感。受け身もとれずに床に落下した。

「ぐっ…はあ…！」

何とか立ち上がりながら状況確認。先輩は俺の腹を右手で殴った、それは状況から推理できた。が、この熱さは何だ？明らかに殴っただけじゃあ無い。つか、殴っただけじゃあ服は焦げない。俺の腹部の服はしつかりと焦げていた。…その理由は…すぐにわかった。先輩の回りに、俺の雷の様に炎が渦巻きだした。

「成程な…俺の炎バージョンって事か…」

炎を纏った拳で殴られた訳か。そう思った瞬間、また先輩が消えやがった。

「同じ手を何度も食うかよ…！」

俺は稲妻を自分の回りにドーム状に発生させた。

「…ちい！」

先輩は舌打ちしながら接近を止めた。そのまま後ろに跳ぶ、その瞬間…

「隙だらけだぞ、暁香 昂輝…！」

いつの間にバトルライザーを起動していたのか、伊集院が一気に接近し、奇襲をかけた。

「ちい！！」

舌打ちして更に後ろに下がろうとする暁香先輩。だが、…遅い。伊集院の忍刀が先輩を捉えた、そう思った時だった。伊集院の前にミサイルが降ってきた…えっ、ミサイル！？待てや、何でもありか！？

「おおっとお！！」

ワザとオーバーにリアクションしながらミサイルを全弾避ける伊集院。あいつ、絶対に本気でやってないだろ…。言葉に真剣さを感じられない。

「ナイス援護、潤」

「なーに、気にすんな」

なはは、と笑い声が聞こえた。成程、今の邪魔は澤木先輩か。声のした方を見ると…澤木先輩は…宙に…浮いてるう！？反則だろ！…ターバンが無くなっており、そのかわりに緑のバンダナになっている。服装は至ってシンプル、白の半袖のTシャツに黒いジーンズ。だが…背中にはマ○ジ○ン○ガ○Zのジェット○ス○ラ○ダーの黒いバージョンが…生えている。右腕にはミサイルの発射口が付いている…サイボーグなのか？

「さーで、ここまでやったらもうケリつけるしかないぜ、昂輝」

こんな状況なのにすんばらしく気楽な声が聞こえる。

「すまん、ここまでやる気は無かったんだがなあ…予定が狂った」  
「予定？何の事だ？」

「さて、そこまで暴れたいなら相手してやるよ、伊集院」

「ふっ…後悔しても知らんぞ？」

「はっはっは、そりや面白そうだ。…なら、やってみい！！」

澤木先輩が一気に急降下して伊集院に襲いかかる。伊集院はそれを軽く流した。…どうやら伊集院はほかつといっても大丈夫そう。それよりも…俺は暁香先輩と再び睨み合った。…今度は…俺の番だ！！

「数学ポイント、解放！！」

「承認シマス。スキル、『雷鳴波』ヲ解放」

俺の刀が再び雷を纏う。まともにやりあったって勝てない事はさつき分かった。なら…一撃勝負でケリをつける！！

「理科ポイント、解放！！」

「承認シマス。スキル、『炎竜波』ヲ解放」

暁香先輩はこの勝負にのつてくれた様だ。炎の竜が先輩の前に現れた。…勝てるかな？いかんいかん、弱気になってどうする。俺はここで勝って、一発ガツンと先輩たちに言うんだ。その為にも…勝つ！！

「天駆ける紅き聖獣よ、我に仇なす者を焼き尽くせ！！『炎竜波』

！！」

炎の竜が俺に向かって放たれた。

「天空貫く大なる剣よ、波動と成りて敵を撃て！！『雷鳴波』！

！！」

刀から雷のソニックブームが先輩に向かって飛んだ。炎の竜と雷がぶつかった。もちろん…大爆発した。そして…

「バトルライザー破損、システム停止シマス」

暁香先輩と俺、二人揃ってバトルライザーが壊れた。そう、相討ちになったんだ。まあ、頑張った方が、俺はそう思う事にした。

## 雷VS炎（後書き）

誤字脱字、これは絶対におかしいだろ、てのがあつたら教えてくだ  
さい。直ぐに修正します。

## 模擬戦終了（前書き）

更新遅れてすみません。 ちょっと色々バタバタしてて…これから  
ちゃんと更新していけると思います。

## 模擬戦終了

自分の戦闘が終わった俺は、伊集院と澤木先輩の戦いに目をやった。  
「そらそらそらあ！！！！避けてばかりじゃ勝負にならんぞお！！」  
これでもかとミサイルやらガトリングやらをぶつ放す澤木先輩。それを確実に回避していく伊集院。中には追尾式のミサイルだってあるんだぞ、どうやって回避してんだ、伊集院。そう思ってたらミサイルの煙で伊集院の姿が見えなくなった。

「しまった、撃ち過ぎたか…」

澤木先輩が伊集院の姿を見失っている。成程、これが狙いだった訳だ。賢いなー、伊集院。そして…

「…もらったぞ！！」

声と共に伊集院が煙の中から跳び出した。

「後ろか！？」

澤木先輩も声のした方向に振り向く。だが…少し遅い。伊集院の忍刀が襲いかかる！！だが…

「…お痛はメツ、ですよ？」

久城先輩が忍刀を薙刀で止めている。巫女服に身を包み、朱色の薙刀で武装している久城先輩…またかよ！！だが…こっちだってまだ戦力はある。

「…甘い…！！」

岩瀬が久城先輩に斬りかかる。伊集院を弾き飛ばし、岩瀬の攻撃を防ぐ。だが、更に…

「援護するわ、詩織！！」

ルミナがハンドガンで援護する。

「ぬお！！」

澤木先輩がルミナの放った弾丸を全てミサイルで撃ち落とす。

「安心するのはまだ早いぞ！！」

体制を立て直した伊集院がまた澤木先輩に斬りかかった。

「う…おっ！！」

伊集院の忍刀を澤木先輩は素手で受け止めた。どうやら澤木先輩はシステムを起動するとサイボーグになるようだ。でなきゃあ腕は真つ二つのはずだ。

「潤君！！」

久城先輩が澤木先輩の援護に入ろうとする。だが、岩瀬の攻撃とルミナの援護射撃によつて思う様に動けない。

「コンビネーション良すぎだろうがよ！！」

澤木先輩が思いつきりばやいた。先輩としての意地か、伊集院を何とか弾き飛ばし、左腕のガトリングで追い打ちをかける。伊集院はその弾丸の雨を二本の忍刀で防ぎながら突っ込む。正に一進一退の攻防戦が行われていた。岩瀬とルミナは協力しながら久城先輩を足止めしている。これならいける、そう思った時だった。

「サーズ・ギア発動！！」

その声と共に、一瞬で戦闘のケリがついた。…一年生のバトルライザーが全て…壊されていた。やったのは…獅子堂先輩だ。服装が改造学ランに変わっている。つまり、能力を使つたって事だ。

「模擬戦は終了だ、一年生」

暁香先輩がそう言った。模擬戦だ！？今の無茶苦茶なのが？俺は抗議しようとした瞬間…

「すまなかった」

暁香先輩が頭を下げた。

「一年生がどこまでの実力を持っているのか、今現在の実秘めている力を見るためにあえてこんな無茶をやった」

えっ…ということは…今までのワザとか！？

「ごめんね、特にドラゴンを圧倒した歩君の実力が直に見たかったの」

すまなそうに言ってくる久城先輩。

「本気じゃ無かったとはいえ、昂輝と相討ちまでよく持って行ったな」

にひひ、と笑いながら賞賛してくれる澤木先輩。

「潤、お前は俺が介入しなかったら本当にヤバかっただろうが」  
溜息をつきながら話す獅子堂先輩。

「それくらいにしろ、お前ら。…さて、一年生」

たしなめながら晁香先輩が話した。

「お前達の基礎能力が高いのは分かった。だが、神沢以外はまだまだだ。システムを使いこなせていない。これは一年生は当然の事だ、責める気は全くない。だが、Dクラスは少数数だ。これで戦争をやるには、個人個人が即戦力でなければならない。そこで、これからBクラスとの戦争までの一週間、俺達Dクラスは授業を全て免除し、戦闘特訓に当てる事にした」

「一週間授業免除！？夢の様な事だが、やったらやったで問題が無いか！？…これからどうなるんだろうか…これからに一抹の不安を覚えながら、今日もまた終わっていった…」



## 特訓という名の拷問だよ！！

昨日、Dクラスは授業を一週間免除して戦闘訓練を行う事になった。武争学園のバトルライザーは特殊で、まず身体能力が跳ね上がり、服装が戦闘用に変わり、それぞれの人に合った武器と特殊能力が加わる。例えば、俺の刀に雷、暁香先輩は武器は何か知らないが、能力は炎、榊宮先輩の武器は両手剣、能力は剣から放たれるビームみたいなやつ、みたいにだな。ちなみに、武器が無くて素手つてのもあるらしい。…そういえば、獅子堂先輩は模擬戦の時に一瞬だけ能力を使ったが、早すぎて何も見えなかったな…能力の詳細と武器を今度本人に詳しく聞いてみよう。更に、勉強によって能力や力が変わる様になっている。点数が高ければ高いほどその恩恵も高く、勉強すればその分強くなれる。ちなみに、文系教科は単純に身体能力、理数系教科は必殺技が増える、その他の体育とかの教科は能力の性能が高くなる。ちなみに、一年生は最初の内はシステムの使い方が分からないので、伊集院とかの様に突撃の様な単純な戦闘しかできない。だからこそ、最初の内の戦闘訓練は面倒だがやる必要があるだろう。それは一向に構わないんだが…だが…何故、訓練場所が…山なんだあ！！！！！！！！！！？？？？？？？？大いなる自然の中で精神を鍛え、自らを磨くのが目的とか言ってたな…いつの間にスポコン物語になったんだよ！？

「そこ、隙だらけよ？」

そうこう考えている内に久城先輩が薙刀で斬りかかって来た。ギリギリでそれを刀で流した。…しまった、考え事に夢中で自分も特訓中だつて事忘れてた。薙刀を流された動きを利用して身を低くして回し蹴り、狙いは…足払いだ。

「…女の動きじゃねえ！！」

思いつきりばやきながら跳躍し、足払いを回避する。更に舞う様に薙刀での連続斬り。俺は紙一重で…

「ぐはあ!!」

避けられるかあ!!…思いつきり直撃しました。はい、痛い事この上ないです。一瞬でズタズタさー。

「…歩君…大丈夫?」

心配そうに声をかけてくれる久城先輩。…特訓中もこれだけ優しいといいんだけどなあ…特訓中はマジで鬼だもんない。

「…大丈夫に見えます?」

地面に伏せながら呻く俺…カッコ悪。

「アハハ…ちよつと休憩しよつか?」

これまた優しい提案だ。…特訓中もこれくらい優しくしてほしいね、全くさ。

「そうすっね…流石に疲れました」

俺は立ち上がりながらそう言った。慣れてるっていつても、疲れるもんは疲れるしな。

「やつぱり、歩君他の子達とは違うね。普通、最初の内の一年生はみんな四時間もシステムを起動させてられないもん」

…それは俺が学園の理事長と学園長の息子だからです…なんて口が裂けても言えねえ…。

「そういえば…他の子達は使えなかったけど、歩君だけどうしていきなり能力が使えたの?」

げっ…確信ついてくるねえ、久城先輩…

「えーつと…まあ、あれですよ」

言葉が出てこねえ!!

「あれ?」

俺の顔を下から覗きこむような感じで見てくる久城先輩…やめて、その純粋な瞳で俺を見ないでえ!!

「…と、つとにかく、伊集院達の様子を見に行きましょう」

苦し紛れの言葉がこれかよ!!俺って、アドリブの才能皆無かもな…。

「そうねえ…昂ちゃんがやりすぎてなければいいんだけど…」

そう、能力を扱う技能群を抜いて高いが、肉弾戦や武器を使った格闘戦の技能が皆無な俺は、久城先輩に猛特訓されている。それと同じように、伊集院達も暁香先輩、獅子堂先輩、澤木先輩の三人による猛特訓という名の拷問を受けているのだった。榊宮先輩と椎堂先輩、御久間先輩は暁香先輩から別の指示を受けたく、今は別行動だ。

「それじゃあ、休憩も兼ねてルナちゃん達の様子を見に行こうか？」  
どうやら話をそらすことには成功したようだ。…ちなみに、ルナちゃんとはルミナの事だ。ルミナのルとナをとってルナというニツクネームになったらしい。

「はい、そうと決まったら早速行きましょう」

…よし…このまま今日の特訓を有耶無耶うやむやにしていこ…

「あくまで息抜きだから、特訓はこれで終わりじゃないからね？」  
あなたはエスパーか！？…これ以上やったら倒れるような気しかないぜちくしょー！。

特訓という名の拷問だよ!!!(後書き)

誤字脱字があれば報告してください。直ぐに編集しなおします。

## サバイバルは好きですか？（前書き）

投稿遅れてすいません。資格試験や部活、色々あって中々更新できませんが、これからも頑張って投稿して行きますので、よろしくお願いします。

サバイバルは好きですか？

「能力を使う時に一番大事なのはイメージだ。自分の身体を通して力が出てる感覚をイメージしろ。岩瀬、自分の事に集中しろ。ルミナ、力み過ぎだ。肩の力を抜いて深呼吸しろ。伊集院、無駄だ、絶対に逃がさんぞ。」

俺と久城先輩が様子を見に来た時、暁香先輩達指導の下、三人は特訓の真つ最中だった。

「昂ちゃん、みんなに無理させてないよね？」

心配そうに久城先輩が暁香先輩に話しかけている。……久城先輩、俺にはたっぷり無理させてますよね？

「昂輝、準備ができず。」

いきなり俺の後ろから御久間先輩の声がした。見れば手に何か怪しい機械を持っている。・・・嫌な予感しかしないんだが・・・

「おっし、なら早速始めつか。」

そういうと暁香先輩は怪しい機械を受け取り、スイッチを・・・入れた。途端に眩い光が巻き起こった。そして・・・目を開けた時には・・・

「・・・何だこりゃあ!!!!!!!!!!!!!!? ? ? ? ?  
? ? ? ? ?」

当たり前一面見渡す限りの大木。さっきまではこんな場所にはいなかった。さっきまでは確かに河原にいた。・・・どうなってんだこれ・・・。ええい、まずは状況整理からだ。服装はジステム起動時のだし、刀もあるし能力も使えるっばい・・・つまり、ここは仮想空間な訳だ。そういう思案している時だった。

「あー、あー・・・テスト、テスト、ただ今マイクのテスト中。ただ今マイクのテスト中・・・」

どこからともなくアナウンスが聞こえてきた。この野太い声は……

「あー、これからお前らにはバトルライザーを使ったサバイバルゲーム的なものをやってもらおう」

「・・・サバイバルゲーム!? しかも的なものって何だ!?

「まずはお前等のバトルライザーを見てみる」

バトルライザーを? 俺は言われた通りに見てみる。すると、リミット解除の文字が水晶に浮かび上がっている・・・って、リミット解除だ!?

「見ての通り、システムのリミットを強制的に外してある。これで誰でも能力が使い放題って訳だ、良かったな」

よくねえよ!!!!!! 笑いながらサラッと恐ろしい事言ってるじゃねえ!!!

「さて、次は右腕を見てみる」

もうリミット云々には触れないのか、ノータッチでいいのか!?!? ・ノータッチなんだろうな・・・俺は諦めて右腕を見た。見た事もない赤い腕輪が着いている。

「派手な色の腕輪があるだろう? それはお前等のチームを表している。色が同じなら見方、違うなら敵だ。戦力は均等に俺が分けた、ハンデとかは無いから安心しろ」

成程、つまり俺は赤チームな訳だ。

「後はルールの説明だ。といっても、ルールは至ってシンプルだ。先に他のチームを全滅させたら勝ちだ。どうだ、シンプルだろう? 」

成程、今回は理にかなっているのかもしれないな。前の模擬戦は一年VS上級生、あれにはフェアなんてモノは無かった。だが、今回は一年生の能力の使い方勉強とレベルアップ・・・実践が一番手っ取り早いだろう。・・・これ以上の練習は無いな。

「さて、お前等準備はいいな?・・・よくなくってももう始めるがな」

「・・・じゃあ聞く必要ないんじゃないか?

「いくぞ、・・・始める!!!!!!!!!!!!!!」

先生の野太い声のアナウンスは戦闘の始まりを告げた。その瞬間だ

った。

「隙だらけだぞ、神沢！！」

「御久間先輩！？」

後ろからいきなり御久間先輩が奇襲を仕掛けてきた。どういう原理だか知らないが、両手の甲から碧い水晶の剣あおが生えている。

「んなろお・・・！！」

俺は右に跳んで紙一重で避けた。それと同時に、御久間先輩の腕輪を確認した。・・・赤だ・・・つまり・・・

「御久間先輩、待った！！俺は見方だ！！」

こうするのが自然だろう。俺は武器を置いて腕輪を見せた。

「お前のも赤・・・すまん、てつきり敵だと思ってた。」

どうやら誤解は解けたらしい。俺はホッと一息ついた。誰だって見方も分らないのにいきなり戦闘はしたく無いだろう。見方が見つかったし、とにかく現状を整理しよう。

「先輩、今の戦況ってどうなってるか分かりますか？」

「すまんが俺にも分からないんだ。誰が敵で見方なのか見当も付かない。正直、片っぱしから会った奴と戦闘して行くしかないだろうな。」

「・・・やっぱりするんですね・・・」

俺は深くため息を吐いた。どうやらとことんまでやり合うしか道は無いらしい。・・・しんどい事になりそうだ。なら次は戦力の確認だ。御久間先輩はどんな能力なのか知りたいしな。

「先輩はどれくらい戦えますか？」

「・・・あんま戦闘は得意じゃないんだよ、俺」

苦笑しながら先輩は応えてくれた。・・・何かイメージ通りっぽいな。

「ちなみに、俺の能力はこんなんだ」

そう言つと・・・腕を前に出した。そして・・・

「思案具現化・・・ハンドソード！！」

そう言つと両手の甲に再び水晶の剣が現れた。その様子はまるで何



かのデータが現実世界に引き出されている様だった。

「俺の能力は自分でイメージした物を具現化することが出来るんだ。だが、具現化出来る物にはルールがある。一つは生物は具現化出来ない。次に、具現化出来る物の数は限られている。最後に、意思があるものは具現化出来ない。・・・とまあ、結構不便な能力だ。」

いや、十分凄いなと思うんだが、俺は。

「お前や昂輝の様な完全な戦闘特化の能力じゃないからな、戦闘では使い方が難しいんだ。」

そう苦笑しながら御久間先輩が言い終わった時だった・・・

「ほおーう、なあーるほど、これならば、俺にも勝ち目がありそうだなあ！！」

どこからともなく聞き覚えのある嫌ーな声が聞こえてきた・・・

サバイバルは好きですか？（後書き）

誤字、脱字がありましたら報告してください。直ぐに修正します。

## 鋼鉄のペテン師&氷の女王

高笑いを続けるこの声、そう、この声の主は……

「伊集院!!」

「ご名答!!」

「とうつ!!」という声と共に伊集院が俺と御久間先輩の前に姿を現した。こいつ、木の上に居やがったな。

「伊集院、お前は筋は悪くない。だが、いい気になるなよ……二人同時に相手にして、本気で勝てる気にいるのか?」

御久間先輩が伊集院の真意を確かめようとする。俺が伊集院だったとしたらこれは迷わず逃げる。だが、伊集院は自ら向かってきた。しかも勝機有とも言っていた……何が狙いだ?

「俺はな~~~~~んにも隠してなどいないがなあ」

この野郎、お前は桜だらけの某エロゲに出てくる悪友か!?

「……思想具現化……ハンドソード!!」

俺の横で御久間先輩が動いた。両手の甲に碧い水晶の剣が形成されていく。

「ほおう……やる気満々ではないか、御久間 聖子!!」

そう言うと、伊集院も忍刀を……構えない!? どういうことだ? 伊集院は軽く身構えただけ……何を企んでやがる。

「嘗めているのか、伊集院……確かに俺は戦闘はあまり得意ではないが、丸腰の相手に後れをとると思っおくっているのか!?

言い放つと同時に御久間先輩が一気に突撃した。伊集院の胴体を御久間先輩が貫いた、そう思った……だが……逆に御久間先輩の水晶の剣が……砕けた。そのまま御久間先輩が殴り飛ばされた。

飛ばされる最中、御久間先輩は何かを呟いた。

「思案具現化……弾丸針!!」

魔法陣が現れ、伊集院に無数の針が襲いかかる。全て胴体に命中した、だが……全て伊集院に刺さることなく下に落ちた。だが……

「そこだあ!!」

これに乗じて距離を詰めた俺も刀で斬りかかる。だが・・・右手で止められた。

「まだまだあ!!」

そのまま空中で体を捻り、踵落とし、ガードされた。そして俺は・

・  
「いつてえ!!!!!!!!!!!!!!」

足に襲った激痛の為に着地できず、そのまま地面に倒れ、転げまわっていた。どういう事だ!? 伊集院の体が滅茶苦茶硬い。

「能力とは便利なものだなあ、同志神沢よ。その程度、この俺の『炭素硬化能力』の前では痛くも痒くもないぞ。」

「炭素だと!?!」

御久間先輩が驚愕の声を上げた。炭素つて言えばつまり・・・

「つまりあいつの体はダイヤモンド並に硬いつてのかよ!!」

そりゃあ刃が通らない訳だ。鉄よりも硬いんだから。たく、あいつはどこぞか錬金術師のの強欲の塊か何かかよ? 何にしたって、圧倒的に戦いづらくなったのは確かだ。何せ今の伊集院は鉄壁の防御と、元から持つ圧倒的なスピードがある。迂闊に近づけばこっちがやられる。ならば・・・

「これならどうだ!!」

俺は雷を纏った斬撃を放つ。伊集院は避けようとはしない。

「ふん、その程度の斬撃、俺には通用せんぞ!!」

伊集院はその斬撃を硬化した腕で弾いた・・・かかった!!

「のおう!?!」

伊集院の体に強力な電流が流れた。読み通りだ。

「刃は通らなくても電気までは防げねえだろ」

「ぬう・・・盲点だったぞ」

流石に電撃は効いたらしい。伊集院はその場に膝を付いている。おし、このまま一気に・・・

「何てなあ!! 頃間だ、頼む!!」

伊集院が不敵に立ち上がりながら合図らしきものを言った。まさか、見方がいるのか！？そう思ってから後ろを見た。俺の後ろに迫っていたのは・・・吹雪！？

「危ない、神沢！！思想具現化・・・防御壁！！」  
プロテクトウォール

咄嗟に御久間先輩が俺の前に入って庇ってくれた。・・・あの防御壁が無かったら確実にやられてたな、俺。

「不意打ちとは・・・お前もやることがえげつないな、久城」

「歩君はこうでもしないと倒すの難しいのよ、聖子くん」

周りに冷気を纏いながら久城先輩がニツコリと笑っている。・・・意外と腹黒いのな。

「という訳で・・・まずは二人ね」

そう言うと、さっきよりも巨大な吹雪が久城先輩の周りで形成されだした。・・・ヤバイ！！

「させるか・・・つて、おわあっ！？」

雷を放とうとしたら伊集院が突撃してきた。・・・こいつ、的確に邪魔しやがった！！

クロスカルセイド・リバースセルシウス  
「『聖十字反転絶対零度！！』」

凄まじい吹雪が俺と御久間先輩に襲いかかって来た。・・・やべえ、ガード出来る訳が無い！！せめて最大技で相殺して抵抗を・・・

クロスカルセイド・リバースライトニング  
「『聖十字反転雷光波』！！」

最大級の雷で相殺を試みるが・・・駄目だ、吹雪に飲まれる！！真つ白な吹雪が目の前に迫った時だった。

クロスカルセイド・リバースデストロイア  
「『聖十字反転地獄炎』！！」

巨大な爆炎が・・・吹雪を・・・消し飛ばした。・・・俺は・・・この炎を知っている・・・そう、この

炎の持ち主は・・・暁香先輩。腕輪の色は・・・赤だ。つまり・・・見方だ。

「歩、聖子、二人とも無事だな？」

ただ何気なく言っただけの言葉だろう、だが、俺はその言葉がとても心強く思えた。

「何とかな」

御久間先輩が苦笑いしながら応える。俺達の無事を確認すると、暁香先輩は青チームの方に向き直った。そして・・・

「さて、好き勝手やってくれた礼だ。それ相應の借りを返させてもらおうか」

反撃宣言を言い放ったのであった。

## 鋼鉄のペテン師&氷の女王（後書き）

誤字脱字、おかしい点があれば教えてください。すぐに修正します。

## 勝利の為に！！

「反撃開始だ、行くぞ！！」

暁香先輩は拳に炎を纏って伊集院に突撃した。伊集院も腕を硬化させて対抗する。互いの拳がぶつかり合う。拳の威力は硬化の強度によつて伊集院が勝っている。伊集院はそれが分かつているらしく余裕の顔だ。しかし、暁香先輩はさらに余裕の笑みを浮かべている。

「伊集院、炭素はよく燃えるよなあ！！」

暁香先輩は拳の炎を一気に大きくした。伊集院は直ぐに拳を引いたが間に合わず、自分の体に着火し、体が日に包まれた。・・・成程炭素効果でダイヤモンドと一緒にの強度になったとしても、ダイヤモンドも元は炭素だ。火を着ければ当然燃えるって訳か。

「ぬう・・・盲点だったぞ・・・」

伊集院は硬化を解いて、何とか自分に燃え移った炎を消した。そのまま腰の鞘から忍刀を抜き、構えた。硬化して戦うには分が悪いと判断したのだろう。両者、睨み合いが続く。一触即発の空気、それを破ったのは・・・久城先輩だった。両手を地面に当てている。

「伊集院君、危ないから退いてなさい！！氷床！！」  
アイスフロア

技名を言うのと同時に久城先輩の周りが氷始め、凄まじい速さでその範囲は拡大していく。どうやら辺り一面氷らせる気だ。伊集院は跳び上がり、とばつちりを受けないようにしている。冷気が触れたものを全て氷らせるって、完璧に敵も味方もあったもんじゃないのな。・・・かといって、俺だって黙ってやられる気はない。刀を地面に突き刺し、それを足場にして跳び上がる。更に空中で雷を右の拳に集め、それを三又の槍の形に束ね、刀に向かって投げる。

ライジンソウ  
「雷神槍！！」

雷の槍が刀に落ち、その衝撃で冷氣と氷を吹き飛ばし、俺はその吹き飛ばした場所に着地した。どうやら御久間先輩は俺と同じく跳び上がって回避していた様で、俺の近くに着地した。暁香先輩は・・・



氷のオブジェになってる！？嘘！？まさかの暁香先輩が逃げられなかったのか！？・・・と思ったのは間違いだったらしい。暁香先輩のオブジェが炎に包まれ、炎の中から先輩が出てきた。どうやら効かないから避けなかったらしい、再び伊集院と睨み合う。流石は爆炎の使い手だ。

「昂ちゃんに通用しない事は分かってたけど、歩君が咄嗟にあんな風に回避する何て思ってた無かったよ」

ニツコリと笑いながらそんな事を言う久城先輩。・・・鬼だ。

「神沢あー！！」

「はい！？」

先輩がいきなり俺を呼んだ。表情から察するに、あんまりいい状況じゃあなさそうだ。

「この戦闘、俺と聖子しょうじに任せてくれねえか？」

「ふえっ！？」

いきなりの暁香先輩の言葉に、俺は素っ頓狂な声を出してしまった。つか、何でだ？俺はてっきりこの戦闘をどうやって勝つかの指示だと思っただが・・・

「優姫のさっきの攻撃でハッキリした。あいつ等の狙いは俺達の足止めだ。」

「足止め？何のためにそんな事を？第一、メリットは？」

訳が分からない。俺と暁香先輩、更には御久間先輩をたった二人で足止めにする・・・一歩間違えれば自分っちがやられるのに・・・何故だ？

「最初に先生がアナウンスで言った事を思い出してみろ。どんな風にチームを分けたって言うてた？」

・・・どんな風につて・・・俺は考えてみる。《平等になる様に分けた》・・・つて・・・平等に・・・？・・・まさか・・・そういう事か！！

「まだこっちにも相手にも仲間がいるんだ！！・・・けど、それが俺達の足止めと何の関係があるんですか？」

やつは何のメリットも無い様な気がするんだが・・・

「一年で一番強いお前、クラスの現参謀役である聖子、そして俺・一部でとびきり秀<sup>ひい</sup>でた奴らとある程度の奴らで構成されたのが赤チームだとしたら・・・青チームはどうなる？」

えーと、それはつまり・・・

「・・・青チームは主力メンバーの集まりって事ですか？」

「正解だ。ならお前が青チームだったとしたら勝つ為にどんな策を立てる？」

「相手チームの主戦力を孤立させ、消耗したところを一気に叩きます・・・って、まさか!？」

俺は考えついてハッとなった。そう、これは相手チームの勝利への下準備だ。主戦力を孤立させるにはまず周りを消すのが手っ取り早い。それを確実にやり遂げる為には・・・他のメンバーに主戦力と合流する前に奇襲を仕掛けるのが一番だろう。そして、主戦力は助けに行けない様に最低限の足止めをする・・・今俺達が陥っている状況こそが正にその足止めだ。先輩はそれに気付いて俺を助けに向かわせる気なのだろう。なら、さっさとここを離れよう・・・

「・・・ってえ、おわあ!？」

久城先輩が薙刀で斬りかかって来た。ギリギリで刀で防ぐが、ヤバい、力負けしてる!？くそっ、何で三年生はこうも動きが早いんだよ!？

「・・・何処に行くの、歩君？」

口調は優しいが、目が笑って無いって!!力負けしている為、徐々に押されて体制がキツくなっていく。ヤバイヤバイヤバイ!!やられる!!その瞬間、久城先輩が吹っ飛んだ。そのかわりに俺の目の前には、如意棒<sup>こゝろぼう</sup>の様な紅く、金で装飾されている棒を手にしている暁香先輩がいた。どうやらその棒で久城先輩を吹き飛ばしたらしい。ゆっくりと久城先輩が立ちあがる。

「いたた・・・昂ちゃん、容赦無いなんて酷いよ」

「神沢、分かったなら早く行け。俺も優姫が相手じゃ他に構う暇は

無いんだ」

苦笑いしながら久城先輩と対峙する晧香先輩。確かに、余裕は無さそうだ。早く行くべきだな。俺は身をひるがえすが、そう簡単に行かせてくれない奴がいた・・・伊集院だ。

「行かせんぞ、同志神沢あ！！」

腕を硬化して襲いかかってくる。しかし、こっちにだってもう一人見方がいる。

「邪魔はさせんぞ、伊集院」

俺と伊集院の間に御久間先輩が割って入る。だが、伊集院は攻撃を躊躇する様子は無い。それどころか跳び上がり、一撃に更なる威力を与える気だ。それもそのはず、御久間先輩の能力が伊集院じふんには効かない事が最初の攻防で分かっているからだ。しかし、そう何回も同じ事が御久間先輩に通用するはずが無い。御久間先輩は伊集院のその動きに合わせて右の拳を引く。真っ向から伊集院と勝負する気だ。

「ほおう、効かないと分かっているながら再び挑むとは・・・いい度胸ではないか！！」

調子乗ってるな、伊集院の奴・・・痛い目に遭っても知らねえぞ。

「確かに、さっきの武器は効かなかったな。だがな、こいつを硬さだけで防げるか？」

そう言うと、右の拳が碧い水晶に包まれ始めた。さっきまでの武器とは具現化の仕方が違う・・・つまり刃物じゃない。あの丸い形は・

・鈍器？

「思案具現化・・・推進鉄球ジェットフレイル！！」

右の拳が西瓜大の碧い水晶の球体として具現化完了すると、右腕を伊集院に向けて突きだすと同時球体がもの凄い勢いで射出された。・  
・あの球体、推進エンジン積んでやがる・・・つか、そうじゃないとあの球体の加速の仕方は説明できないだろう。空中にいる伊集院に一気に届き、そのまま思いつきり吹っ飛ばした。そのまま伊集院は地面に落ちた。見た感じかなり効いてるな、今の。目標を吹き

飛ばした球体は、連結されていた鎖によって腕に戻って来た。球体には傷一つ無い・・・あの球体、ダイヤモンドよりも硬いのか？

「ぬう・・・油断した・・・まさかそうくるとは・・・」

苦しそうに呻きながら伊集院は立ち上がった。腕でガードし、ギリギリ直撃は避けた様だが、ダメージは大きい様だ。ガードした右腕にはヒビが入っている。

「斬るのが駄目、撃つのも駄目、薄い刃物じゃ防がれて碎かれる・・・そうきたら残る選択肢は一つだ・・・密度の高い超重量の武器で叩いて叩いて叩きまくる！！」

御久間先輩が再び球体を放つ。

「おのれ、そう何回も上手くいくと思うでないぞ！！」

伊集院は回避し、反撃の為に態勢を立て直そうとするが、その足取りは重い。どうやら御久間先輩の読みは正解だった様だ。

「これで五分だ・・・神沢、行け。行って俺達を勝利に導け！！」

俺は力強く頷いた。これなら心配はいらない。俺は再び駆け出した、相手の策を潰し、赤チームに勝利をもたらす為に、先輩達の助けを無駄にしない為に・・・

「歩君一人であの二人を何とか出来ると本気で思ってるの？昂ちゃん」

「なあに、出来なかったらこっちが負けるだけだ・・・俺には見届ける義務がある・・・二年後、あいつがDクラスを率いるだけの男になるか・・・俺達の勝利を賭けて、ひと勝負といこうじゃねえか！！」

これで何度目か、炎と冷気が再び衝突を始めた。

**勝利の為に!! (後書き)**

誤字、脱字があれば教えてください。すぐに修正します。

## たとえ刃が折れようとも（前書き）

すいません、就職活動やら部活やら何やらでバタバタしてました。少しは落ち着いたので、少しずつですが更新して行こうと思います。この小説を読んでくださっている方々、本当に不定期で遅い更新ですいません。

## たとえ刃が折れようとも

さて、なんとか戦闘から抜け出せた訳だが・・・何処へ行けばいいんだ？仲間の救援っていつてもなあ・・・何処に味方がいて、何処に敵がいるのか分かったもんじゃねえ。完全に八方塞がり、何の策も無いのが現状だ。

「・・・俺って頼りにならねえな、おい」

完全にぼやきだな、うん。何せここまで情報が無いんだ、見つからなくてもしょうがない・・・よな？・・・と思った瞬間、後方で大爆発が起こった。さつきから右の方でも爆発は起こっているが、あれはさつきまで俺もいた戦場、つまりは暁香先輩達のいる場所だ。ということとは・・・後方で起こった爆発は他の戦闘によるものだ。つまり・・・

「西が正解だ！！」

そう言う俺は一気に西へ駆け抜けた。・・・こっちで正解・・・だよな・・・多分・・・

さっきの爆発の起こった場所に到着した瞬間、数発のミサイルが飛んできた。俺の周囲は全部木だ、回避は難しい・・・当たる前に何とかするしかねえか。銃の様な形にした指から雷を放ち、ミサイルを撃ち落とす。この角度、流れ弾じゃねえ・・・そしてミサイル使用いそうな能力には覚えがあるぞ・・・

「澤木先輩！！」

叫びながら地面を蹴り、刀を構えながら跳び上がる。・・・やつぱり、空中にいた！！

「正解だぜ、神沢！！」

跳び上がった俺に気付いた先輩が拳を構えながらこっちに突っ込んできた。腕輪の色は・・・青、敵だ！！俺は刀を振りかざす。拳と刀がぶつかり合う。その瞬間、俺の刀が・・・真っ二つに折れた！

「……って、先輩の体も鉄より硬いのか!? 一瞬呆気にとられていた瞬間、俺の首が掴まれた。……まずい……!!」

「はっ、俺が体を自在にサイボーグ変えられる事を忘れたか!?」

そのまま地面に叩き落とされた。あまりの衝撃に一瞬息が詰まる。

「……一応主人公なのにこんななんばつかだな、俺……」

「ぼさつとしてて良いのか? 俺は容赦しねえぞ!!」

両腕をガトリング砲に変えた澤木先輩が間髪いれずに発砲し、攻撃してくる。俺は跳ね起きて左に跳ぶ。……ガトリングは方向転換がきき辛いはず……。このまま一気に横から奇襲を……

「逃がすかよお!!」

あつという間に方向転換されました。こうなったら……

「これでも喰らえ!!」

先輩に向かって折れた刀の柄を投げた。狙いは勿論左腕だ。

「小癪な真似を!!」

澤木先輩は左腕の上げてその柄を回避する。その瞬間、左側の砲撃が一瞬……。止んだ!!

「隙あり!!」

俺は折れた刀の刃を持って突っ込んだ。これも狙いは勿論左腕。気付いた澤木先輩は俺に右腕のガトリングを向けて対応しようとする。だが、俺は止まらずそのまま雷を放つ……。振りをして雷の光だけを放った。

「目くらましだとお!?」

先輩は一瞬怯んだ……。ただその一瞬だけで十分だった。光が止んだ時、俺は……

「ライザーハソン、システムリタイシマス」

折れた刀の刃で澤木先輩のバトルライザーを突き刺していた。そう、俺が勝ったんだ。

「……なん……。だと……。!?」

驚きの言葉を呟いた先輩、徐々に変身が解けていく。俺は先輩の左手から刃を引き抜いた。勿論、血は出ているが、変身が解けると傷



は無い。痛いっていう感覚はあるだろうけど、戦って無傷なのだからそこは目をつぶるべきだろう。

「あーチクショー・・・1人目のリタイアが俺かよ・・・」

先輩が思いつきりばやく。・・・3年生なのに1番最初ってプライドが傷つくんだろな・・・多分。

「しゃーない、負けは負けだ。・・・行けや、神沢」

先輩は何かをふっ切った様に納得すると、自分の後ろを指差した。

「この先でお前さんの仲間と僚矢と朱里が戦ってる。僚矢は昂輝とタイムンはれる位だ、マジで強え、気をつけな」

そう言くと、澤木先輩の姿が消えた。消えたといってもこのバーチャル空間からだ。さて、今の先輩の言葉でこっちのチームもメンバーが分かった。獅子堂先輩と榊宮先輩ならば、こっちにいるメンバーは、ルミナ、岩瀬、椎堂先輩だ。椎堂先輩がどれだけの戦闘力を持っているのか分からないが、さっきの澤木先輩の言葉じゃかなり強いみたいだ。ルミナと岩瀬じゃ・・・勝てるわきゃねえよな・・・早く行こう。そうして俺はこの身で味わう事になったのだ・・・獅子堂先輩の、三年生の本気を・・・

たとえ刃が折れようとも（後書き）

誤字、脱字があれば教えてください。すぐに修正します。

（最近小説の評価や感想の数で弟に負けてます。面白いと思われたら、この小説にみなさまの清き一票を・・・！！）（何）（

## 初めての苦戦（前書き）

最近忙しくて中々投稿できません・・・けど、頑張っ  
て投稿して行こうと思っています

## 初めての苦戦

「・・・嘘だろ・・・っ!？」

俺は今日の前に広がる光景に絶句していた。ルミナと岩瀬が・・・地面にうつ伏せに倒れてピクリとも動かない。その二人の間には・・・一人の人影。俺が暁香先輩達に戦闘を任せてきたのが5分前・・・澤木先輩を倒したのがほんの1分前・・・たった6分・・・獅子堂先輩はその短時間でルミナと岩瀬を半殺しのレベルまでやりやがったのか・・・？

「遅かったな、神沢。あまりにも遅かったからこいつらのバトルライザー破壊してやるうかと思っただぜ」

そう言いながらこっちへ歩いてくる先輩の体は・・・無傷。・・・貧乏くじ引いた予感しかしねえ・・・。

「お前は俺を楽しませてくれるか？」

そう言った瞬間、先輩が一気にこっちに突っ込んできた。右ストレートだ、俺は腕をクロスしてブロックする。よし、受けられないレベルじゃない・・・!!そのままこっちも回し蹴りで反撃を・・・入った!!・・・そう思ったが・・・

「セカンドドライブ!!」

先輩がそう呟いた瞬間、一気に先輩が加速した。その為、俺の回し蹴りが空を切った。・・・先輩は加速系の能力か!!・・・なら、こうだ!!

「天候に満聖<sup>みせい</sup>霊よ、我が声に応え・・・」

「・・・サードドライブ!!」

まずい!!そう思って振り返った時には俺は蹴り飛ばされていた。・・・早え<sup>はえ</sup>!!俺は空中で体制を立て直しつつ雷で槍を形成する。着地すると同時にそれを先輩に向かって投げつけると同時に俺も先輩に向かってダッシュする。勿論、あのスピードの先輩に槍が当たるなんざ思っちゃいねえ。予想通り避けられた、が、回避行動をとつ

た後は誰しも隙ができる。先輩だって例外じゃ無いはずだ。俺は両拳に雷を溜め、そのまま右のストレート。先輩は俺の接近に気付いたが、動けない。・・・先輩が射程内に・・・入った！！後は直撃させるだけ、俺はそう思った。だが、現実には滅茶苦茶厳しかった。「フォースドライブ！！」

このタイミングで更に加速するのか！？その瞬間、俺の世界が反転した。・・・まさか！？あの一瞬で俺の足を払ったのか！？俺は成すすべなく地面に倒れる、その瞬間、腹部に強烈な衝撃が走った。先輩の踵落としが原因だ。やべえ・・・何もできねえ・・・っ。

「おいおい・・・もう終わりか？まだ俺に一撃も入ってないぞ？」俺を試す様な目で見降ろす先輩。・・・ちくしょう、どうすりや攻撃が当たる？どうすればあの速度に喰らいつける！？・・・クソッ・・・何も浮かばねえ・・・。

「・・・俺の見込み違いか・・・もういい、退け」

先輩が吐き捨てる様に言い、俺の左手のバトルライザーを踏みつぶそうとした瞬間、俺の周りの土がいきなり変形し、先端が拳の形になり、先輩に襲いかかった。流石に不意を突かれたのとあまりにも近かったので先輩も回避できず、そのまま土の腕に殴り飛ばされた。「ホント容赦無いですね、獅子堂先輩？」

この声は・・・椎堂先輩だ、そう思って目を開けると、白衣と銀縁の眼鏡をかけた、研究者っぽい服装に身を包んだ椎堂先輩がいた。助けに来てくれたのか？

「・・・お前の相手をしていた朱里はどうした？」

獅子堂先輩はゆっくりと立ち上がりながら椎堂先輩にそう訪ねた。

「榊宮先輩なら僕と彼女達で倒しました」

そう言うと、森の中からルミナと岩瀬が出てきた。さっき倒れてたはずなのに・・・一体いつの間に！？

「成程、俺の詰めが甘かったか」

獅子堂先輩はそう言うと、再び身構える。流石にこの人数相手は迂闊に攻撃できないと踏んだのだらう。獅子堂先輩が受けの体制・・・

勝機あるかもな・・・よし！！俺は気合いで一気に立ち上がると、  
「三人とも、俺の援護をしてくれ！！そうすれば・・・勝てる！！」  
さっきまで倒れていて図々しい願いだと思う。だけど、これでもしも任せっぱなしだったら・・・完全に駄目人間だ。・・・それだけは嫌だ。

「んゝ分かった、歩君。僕も力を貸すよ」

「仕方ないわね、詩織もいいわね？」

「・・・問題無い」

「頼むぜ・・・反撃開始だ！！」

## 初めての苦戦（後書き）

誤字脱字があれば教えてください。すぐに修正します。

**勝利をもぎ取れ！！（前書き）**

毎回遅くなってすみません。今回は夏休みの課題の野郎に邪魔されてました……。いやはや、何で課題なんてモノがあるんでしょうかねえ……。ま、とにかく、これからも更新していくんで、見捨てずに読んでやってください。



勝利をもぎ取れ！！

反撃開始・・・その言葉と同時に岩瀬が動いた。お得意のハルバードを片手に獅子堂先輩に斬りかかる。

「甘いな！！」

獅子堂先輩は岩瀬の攻撃を跳び上がって避け、見事に空を斬らした。だが、岩瀬はそのまま空中にいる獅子堂先輩にハルバードの先端を向ける。

「・・・甘いのはあなたの方・・・伸びて、シルフィード・・・！！」

岩瀬がシルフィード（ハルバード（つか名前あったんだ・・・）に命じると、猿の妖怪が持つてる棒みたいに獅子堂先輩に向かつて柄が伸びた・・・てか、伸びるんすか？虚を突かれた獅子堂先輩はそのままシルフィードに跳ね飛ばされたが、空中で体を捻り、体制を立て直しつつ着地した・・・ここは倒れるよ。どうやら直撃は避けたらしい・・・憎たらしいったら。だが、岩瀬だけでこっちの攻撃は終わらないみたいだ。ルミナがハンドガンで・・・前言撤回、今のあいつの構えている物は・・・ミサイルランチャー！？を躊躇なく発砲・・・もとい発射した。大爆発、大音響に土砂のフルコースが獅子堂先輩を襲う。・・・普通だったら死ぬな。よし、今の内に聞いておくとしよう。

「なあ・・・一つ聞いていい？」

「・・・どうぞ」

俺の問いかけにみんな気付いた・・・三人同時に反応せんでも・・・。

「みんなってどんな能力なんだ？」

「私の能力は見ての通り、重火器系の『武装換装<sup>ぶそうかんそう</sup>』よ」  
ふむふむ、ルミナは武装換装、つと。

「・・・手に触れた物を自由自在に伸縮させる事ができる・・・」

岩瀬はいわゆる『無限伸縮』<sup>エクステンション</sup>か。

「僕のはいわゆる『錬金術』ってやつだよ。触れた物を変形させたり、造り替えたり、材料とかが揃ってれば色々出来るよ。ただし、そこに材料のある物しか造りだせないし、材料以上の物は造れないから、万能って訳じゃないのが唯一の欠点だね」

先輩は錬金術か・・・手を合わせてから使用したら色々アウトだな・・・そうだ。

「先輩、今の状況下で鉄生の物って造れますか？」

「土には鉄分があるから、多分問題無いよ」

よし、これで俺も本気で戦えるぞ。

「刀造ってくれませんか？」

「分かった、少し待って」

そう言くと、先輩は地面に円を描き、何かよく分からない模様を円の中に描いていく。

「ちよつと、もう獅子堂先輩を足止めしとけないわよ!!」

ルミナの怒号が響く。見ると、ルミナのミサイルの残弾が切れかけているらしい。岩瀬も身構えている・・・どうやらマジで時間が無いらしい。

「先輩、早く!!」

俺が先輩を急かす。だが、先輩は冷静に模様を描き切ると、そのまま両手を地面に当てた。さっき描いた魔法陣らしきものが発光し、その光があつという間に刀を生成した・・・この人も何でもありだな。

「完成です」

「!!!ミサイルが尽きた、来るわよ!!」

再びルミナの怒号。だが、先輩と俺は動じなかった。先輩が刀を拾い上げて俺に渡してくれた・・・優しいな。

「どうもっす」

そう一言言つと、俺は刀を振り上げ、さっきまでミサイルの雨が降り続いていた場所に向けて雷の斬撃を放った。再び大爆発、お次は

雷付きなのでさっきより豪華だ。

「僕も攻撃参加、っと」

先輩の足元が発光し、土で造られた数匹の狼の顔が煙の中目がけて襲いかかる。だが、その狼の顔は全て煙の前で一陣の風によって碎け散った。その風は更に加速し、ルミナと岩瀬に一気に襲いかかる。・・・一瞬のすれ違い様に二人のバトルライザーが壊された。・・・さっきよりも数段速い！！そう思った瞬間に俺の目の前にその風がやって来た。咄嗟に刀で防御する・・・なんとか防いだが、全く動きが見えねえ！！けど、やるっきゃねえ、そう思って刀を振るが、風・・・ええい、もう面倒だ。獅子堂先輩は既にその場にいない。椎堂先輩の目の前に一瞬で移動してやがった。まずい、そう思ったが、椎堂先輩は落ち着き払って対応した。獅子堂先輩が襲いかかった瞬間・・・地面を水の様に変化させ、その中に潜って回避した・・・先輩は何でもありかよう！！そして、地面から飛び出すと同時に、椎堂先輩は獅子堂先輩の背面を一気にとった。椎堂先輩のそのままバトルライザーを狙った渾身の右ストレートが放たれたが、獅子堂先輩はそれよりも早く椎堂先輩のバトルライザーを蹴り壊した・・・だから何でもありませんか！？そしてそのまま俺に襲いかかる・・・はずだっただろう。けど、襲いかかれなかった。何故なら、俺がさっきの場所にいなかったから・・・そう、俺は次の行動を起こしてたんだよ・・・さっき椎堂先輩が変化させた地面の中に潜ってたのさ。そして、先輩がやられたと同時に、俺は地面の中から獅子堂先輩の左手目がけて斬りかかった・・・。

**勝利をもぎ取れ！！（後書き）**

誤字、脱字があれば報告してください、すぐに修正します。感想や評価をいただくと、弟を見返して作者のテンションが上がって更新が早くなる可能性があります（調子に乗るな

ま、とにかく、弟の作品ともども読んでやってください（弟の作品名とか作者名が分らないきや意味無いだろ

## 絶対零度の死刑宣告（前書き）

いやはや・・・やっと夏の課題が終わったと思ったら次は就職試験です・・・だれか僕にまともなお休みをください（汗）。

それはそうと、感想を下さった方、どうもありがとうございます。

それを励みに地道に書いてきた最新話です（それにしても短いですが）。どうか読んでやってください。

## 絶対零度の死刑宣告

・・・捕えた、勝った、そう思った瞬間、液体化していた地面が氷った。俺は右足の先がまだ地面に浸かっていたので、足が掴まってそこで止められた・・・って、氷って事はまさか・・・

「僚矢君、大丈夫？」

どうやって来たのか知らないけどいるな、俺の後ろの木の枝の上に・・・久城先輩が・・・暁香先輩を倒したのか？・・・マジか・・・  
「何とかな」

いつの間にやら獅子堂先輩もそっちに退避していた。だが、獅子堂先輩の両腕、両脚共に血だらけになっている。どうやら先輩の能力は無制限の身体能力強化だが、段階を上げていくにつれて体への負担も大きくなるみたいだな・・・俺だったらごめんこうむりたい能力だ・・・って、んな事言ってる場合じゃねえ！！なんとか脱出しないとやられちまう、足元の氷りを砕いて脱出・・・

「あ、その氷り砕くと歩君の足も一緒に砕けちゃうよ」  
するわけにはいかなかった。・・・いやさ、現実には影響ないけどさ、やつぱ痛いのは嫌じゃね？・・・それ以外脱出方法思いつかないけどさ。そうだ、足を引っ張りだそう！！・・・ビクともしないな、うん。

「さて、それじゃあトドメといこうか」

木から下りてゆつくりと薙刀を振り上げつつニコニコと迫って来る久城先輩・・・いや、やめようぜ、・・・ちくしょう、やつぱり足を砕くしか・・・そう思ってた覚悟を決めようとしたら、なんか足が抜けた・・・何で抜けた？俺が自由になったのを確認するや否や、薙刀を振り下ろして氷りの針を飛ばしてきた、が、俺の周りが一気に炎に包まれ、針は全て溶かされた・・・この炎は・・・！！

「無事だろうなあ、神沢あ！！」

丁度久城先輩の逆方向から暁香先輩が炎の中から現れた・・・まだ

やられてなかったのか！！

「あらら・・・伊集院君がいたとはいえ、氷人形じゃ時間稼ぎ位に  
しかならなかったみたいね」

「あつたりめーだ。あの程度でやられてたら生徒総指令長なんてや  
つてらんねーよ」

「ふっ・・・しぶとい奴だ」

そのまま戦いだす三人・・・あれ、いつの間にやら俺蚊帳の外？

「フム、やはり同学年同士の結束は強い様だ。我らは空気だな、同  
志神沢」

やつぱり伊集院もそう思ってたか・・・だよなあ。

「・・・だな、結構居辛い空気だぜ、こりゃ・・・って、伊集院！  
？」

気配もなく俺の隣に来てやがった・・・心臓に悪いぜ・・・って、  
伊集院？・・・生きてたの？

「ハッ！ハッハッハッハッ！油断大敵だぞ、同志神沢！！」

違和感に気付いた瞬間に伊集院の炭素硬化した拳がとんでくる。俺  
は刀の柄で受け止める・・・また刀が折れそうだなあ・・・。

「てか、やられてなかったのか！？伊集院！！」

俺は伊集院と妙な構図で力比べしながら問い詰める。ちなみに、話  
しの流れからして想像できないだろうが、この間俺は必死だったか  
りする。微妙なところで受け止めているため、力が入れずらいからだ。  
「ハッ、この俺がそう簡単にやられると思っていたのか？」

口元に微笑を浮かべながら拳に更に力を乗せてきた。俺も更に力を  
込めるが、何にしても体制が悪い。伊集院の事だ、多分これを見越  
して先手を打ってきたんだろう・・・まったく、せこい奴だ。

「ああ、思ってた・・・よっ！！」

そう言っていると俺は空いていた左手で砂を掴み、伊集院の顔（主に目）  
に向かって砂を投げつけた。伊集院は舌打ちしながら跳び退り、回  
避しようとするが、一步遅く、思いつき砂が目に入ったようだ・  
・ざまあ見る。

「ぬう・・・卑怯なり、同志神沢!!」

目を押さえながら卑怯だと訴えてくる伊集院、どうとでも言えはいさ。その隙に伊集院のバトルライザーに雷を浴びせて破壊した。

伊集院の姿が消えていく・・・これでよしと。さてと、曉香先輩はどうなってるかな？久城先輩の氷人形数体、更に早すぎて良く見えないが、獅子堂先輩と戦ってるな・・・案の定苦戦している様だ。しゃあねえ、参戦するかな・・・

「どこに行くの？」

嫌な予感・・・

「女の子を退屈させる男の子はモテないよ？」

氷りの様に恐ろしい声が俺の後ろから聞こえる・・・消えろ、幻聴!!!!!!俺はまだ死にたくない!!!

「先手・・・必勝!!!!!!」

覚悟を決めた俺は振り向き様に雷の斬撃を放った・・・が、片手で弾かれた・・・うえ・・・マジかよ・・・。

「本気で行くけど・・・覚悟はいい？」

・・・こっから地獄を見そうだな、こりゃあ。



## 絶対零度の死刑宣告（後書き）

誤字脱字等があれば教えてください。すぐに修正します。  
感想などを頂けると、更新が早まるかもしれません（汗）

よろしい、ならば戦争だ！！（前書き）

就職試験が終わって一段落・・・な訳ないです、はい。結果が来るまで終わりません、合格してないと終わらないんです！！

ってなわけで、小説の世界に逃避しようにもネタが・・・まあ、とにかく、短いですが更新します。読んでやってくださいな。

よろしい、ならば戦争だ！！

久城先輩と再び戦闘を始めて数分、俺の周囲にはとんでもない数の氷の鳥達飛び交っている・・・バツチリ追いつめられてます。それよりも、何でもありなのかよ、氷人形つてやつは！！そんなこんな考えていると、氷の鳥が一羽が俺に向かって襲い掛かって来た。それを刀で叩き落とすと、また一羽と次々に襲い掛かってくる。さつきから逃げたは氷の鳥を叩き落としての繰り返しだ、正直言つて切りが無い。ちくしょう、俺の攻撃にも人形系の技があれば対抗できそうなんだけども・・・残念ながら俺の能力にはそんな技は皆無だ。というより、俺の能力には実体と形そのものが存在しない。それは暁香先輩の能力にも言える事だ。けど、久城先輩の能力は氷と冷気を操る・・・氷には実体があるからこういったことが可能になる・・・卑怯だろ？・・・語ってる内に無数の鳥さん達の総攻撃が来た。

「いい加減に鬱陶しいわぁ！！」

俺は叫ぶと同時に雷を放電し、自分の周りごと氷の鳥を消し飛ばした。いい加減我慢の限界だ、反撃を・・・

アイスフロア

「氷床！！」

「とお！？」

雷を放とうとした瞬間に地面が氷りついていく。反射的に上に跳んだが・・・

「残念、隙あり」

空中に先にいた先輩に薙刀の柄で思いっきり殴られて叩き落とされた。ちくしょう、俺の考えが読まれてやがる。けど・・・その長い薙刀が命取りだ！！

「閃光よ、降り注げ・・・招雷ごうらい！！」

俺は地面に叩きつけられる前に技を放ち、空中から巨大な落雷を発生させた。技を出し終えた途端、息が詰まる様な衝撃が体中を走っ

たが、んなことはこの際どうでもいい。なんせ薙刀が避雷針の役割を果たし、久城先輩に雷が直撃したんだ、多少の痛みを気にしてられるかよ。流石に直撃はダメージが大きいらしく、久城先輩はそのまま森の中に落ちていった。おっし、このまま追い打ちを・・・そう思った時だった・・・いきなり周りの景色が変わった。さっきまでは森の中にいたはずなんだが・・・何故か俺の周りは廃墟に変わっていた。・・・あれ？

「歩君、無事？」

そうこう考えていると久城先輩が合流してきた。久城先輩の様子や、腕輪が消えていることから、これはDクラス関連の事では無いだろう。だとすると・・・一体誰が・・・？

「いたぞ、昂輝。あそこだ！！」

「ああ、二人とも無事かあ！？」

晁香先輩と獅子堂先輩も合流した。その瞬間だった、いきなり聞きなれない声で、だが聞き覚えのある声でアナウンスがなった。

「あー、あー、アホでバカで最低なDクラスの愚か者諸君、俺様は天才Bクラス生徒総指令長の倉野 興二くらの きょうじである」

やっぱり・・・あの典型的なヤンキー気取りのBクラス指令長様が・・・つまりこれは・・・

「これより、Bクラス対Dクラスの戦争を始めることにしたあ！！感謝しろDクラスのバカ共お、俺様達が忙しい中直々に出向いてやったのだ」

いや、来なくていいからさ。・・・多分作者がネタに困って急遽戦争を速めただけだろうしさ。

「さあ、戦争の開始だあ！！ヒャーハハハハハハハハ！！！！！！」

あのBクラス総指令長、一方的にアナウンスしておいて一方的に切りやがった。

「あんの野郎・・・戦争は学校でやるのが決まりだろうが・・・しやあねえ、俺達だけで叩き潰すぞ！！」

暁香先輩達は何にしてもやる気みたいだし、この身勝手な振る舞いには俺だつて腹がたつた。だから・・・

「俺も暴れるとしますか!!」

・・・ぶつちやけ久城先輩達との戦いからさつさと逃げたいだけだつたりするけどね

そんなヘタレた考えを胸の奥にしまいこんで戦争が始まった。

よろしい、ならば戦争だ！！（後書き）

誤字脱字があれば教えてください、すぐに修正します。

感想などを頂けると更新が早まったりするかもしれません

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7417k/>

---

私立武争学園 Dクラス戦闘報告書

2010年10月31日06時03分発行